

## 韓国・朝鮮民俗学者宋錫夏における 郷土芸術（民俗芸能）の展開

金 廣 植\*

### はじめに

今日、日本語の「民俗芸能」に該当する韓国語は「民俗芸術」である。「芸能」と「芸術」という違いがあるが、戦前の日本では芸術という用語を使っていた時期があり、簡単に片付けるのは決して容易ではない<sup>1)</sup>。本稿は主に戦前および解放直後における朝鮮の民俗芸術を取り扱っており、芸術という用語を用いる。また今の韓国では、民俗芸術という用語が一般に使われているが、植民地期には郷土芸術といわれていた。郷土芸術は郷土娯楽の中に含まれており、民俗芸術は広義の郷土芸術として使われていた。

朝鮮民俗学会（1932年4月創立）の性格を議論する上で、避けて通れない問題の中の 하나가郷土芸術・娯楽についてである。1937年5月17日に朝鮮民俗学会主催、朝鮮日報社後援で「第1回朝鮮郷土舞踊民謡大会」が開催された。当初は一夜限りの公演予定であったが、昼も公演し、翌日も公演されるほどの好評であった。それに先立ち『朝鮮日報』は、大会を広報する写真入りの6段記事の冒頭を次のように書き出している。

「消え去る朝鮮の郷土芸術を探し出して生かそう」という基礎を立てて、民俗学の権威宋錫夏氏らの力で組織された朝鮮民俗学会では、その第1回朝鮮郷土舞踊民謡大会を来る27日〔正しくは17日—以下、〔〕の中は筆者による〕午後7時から本社後援のもと、府民館ホールで開く〔『朝鮮日報』1937.5.9.以下、日本語訳は筆者による〕。

朝鮮民俗学会が「郷土芸術復興会」であるかのような記述となっている。つまりこの記述は、1938年前後における朝鮮民俗学会の現実を克明に表している。本稿では、なぜ朝鮮民俗学会

---

\* キム ケンシク 立教大学 兼任講師

がこのように変貌したのかに注目し、学会を実質的に導いた宋錫夏（1904～1948年）の郷土娯楽論を検討する。本論に先立ち、学会の成立について簡略に検討したい。

張哲秀は解放後の1964年から1995年まで韓国で公開された民俗学研究史を時期区分しているが、それによると、李杜鉉・印権煥をはじめ、代表的な研究者が1920年代を民俗学の形成期、1930年代を確立期（定立期）として位置づけている〔張 1996：47，印 1978：108-110〕。このような時期区分は、趙芝薫，崔吉城，金泰坤，朴桂弘にも共通している〔趙 1964：235-237，崔 1970：132～134，金 1984：34，朴 1992：36-40〕。先行研究は、1920年代までの李能和（1869～1943年）・崔南善（1890～1957年）による文献中心の研究を民俗学の成立期に、現地調査を行った孫晋泰（1900～？）・宋錫夏の研究を確立期に位置づけるという共通点を持つ。

韓国で一般化している1930年代における民俗学の確立という問題意識は、朝鮮民俗学会と深く結びついており、その成立は重要な意味を持つ。民譚集『温突夜話』（1927年）の著者で、朝鮮民俗学会の発起人の一人である英文学者鄭寅燮（1905～1983年）は、1966年に次のように回想している。

ある日、宋錫夏氏が私の在職していた延禧専門学校を訪ねてきて民俗学会を発起しようと提案し、孫晋泰氏と3者が合席することになり、今は覚えていないが、ある食堂で我々3人が集まって大略の発起会をつくった。それから日本人としては当時京城帝国大学（ソウル大学校の前身）の秋葉隆教授と、一時期京畿道警察部長を務めた今村鞆氏を加入させることに決めた。（中略）はじめに朝鮮民俗学会の発起は宋錫夏，孫晋泰，私を含め3人で始まり，ここに秋葉隆，今村鞆を合わせた5人がその核心であった。そうして5人はたまに会って夕食を一緒にしながら、我々の民俗研究に関する閑談や意見交換を行った〔鄭 1966：190～191。以下、下線は筆者による〕。

鄭は正確な時期こそ明記していないものの、朝鮮民俗学会の発起は宋，孫，鄭を含め3人で始まり，ここに秋葉隆（1888～1954年），今村鞆（1870～1943年）を合わせた5人がその核心であったと述べている<sup>2)</sup>。鄭を除く4人は早い時期に死亡・消息不明となったので、鄭の証言は貴重である。しかし先行研究では、鄭の証言を追認し、鄭の見方による朝鮮民俗学会像をつくってしまったという問題が持つ。実際に鄭は、学会の発起に関わったものの、発起の直後に鄭に代わり、金斗憲（1903～1981年）が中心メンバーになった。『芸術年鑑』（1947年）には朝鮮民俗学会委員として宋と孫の次に金の名が明記されており、それは解放後まで続いたことが確認できる〔金 2013：186，2014〕。

【図1】は韓国国立民俗博物館（ソウル）所蔵のもので、1938年3月5日土曜日の京城の料



【図1】 左から宋、村山、赤松、今村、秋葉、孫、金  
〔韓国国立民俗博物館所蔵〕

理店太西館で撮った記念写真である。左から宋錫夏，村山智順（1891～1968年），赤松智城（1886～1960年），中央の今村，秋葉，孫，金が夕食会に列席している〔全 2005：173，2013：34～36〕。

朝鮮民俗学会の創立以前の宋・孫・鄭および秋葉における民俗学会の必要性に関する共感については，南根祐が詳しく論じているので〔南 2008，2010〕，ここでは，学会の成立以降を概括したい。

『朝鮮日報』は1932年4月16日夕刊に、『東亜日報』は21日に、『中央日報』は22日に朝鮮民俗学会の創立を報じている。『朝鮮日報』と『東亜日報』は，宋錫夏を中心に「孫晋泰 白樂濬 李瑄根 崔瑯淳 兪亨穆 鄭寅燮」を明記し，朝鮮民俗学会に関して最も詳しく紹介した『ドルメン』1-4（1932年）の「学界彙報」では，上記の7人と共に李鍾泰を追記し，宋を幹事と記している。

つまり，朝鮮民俗学会は7人の朝鮮人でスタートした。その後，『大阪毎日新聞』朝鮮版の記事（「燦然たる文化を紹介 理解を持たせる 生れ出た『朝鮮民俗学会』」1934年2月13日）では，秋葉，金素雲を追記している。秋葉など日本人学者の入会は1932年4月以降，1933年1月の創刊号が刊行されるまでのある時期と言える〔金 2013：187〕。

宋は朝鮮民俗学会の実質的な代表として編輯を担当し，李鍾泰は会計庶務を担当した。宋は『朝鮮民俗』第1号（1933年1月）と第2号（1934年5月）を出したが，原稿難などの事情で中断し，1940年に秋葉の編集による第3号（今村翁古稀記念）を刊行している。会費を前納することもなくなり，任哲宰（1903～1998年）は「行事がある時，互いに連絡して集まった。その時の各参席者はその日の会費を出した」と証言している〔任 1992：9〕

先行研究では，朝鮮民俗学会は1940年に學術誌を3号まで刊行し，「政治的弾圧によって1945年光復になるまで全ての活動が中断された」とされる〔金泰坤 1984：35，林在海 2013：29-30〕。しかし，朝鮮民俗学会とその会員は，1940年前後も活動しているので，その意味に関する具体的な検討が求められる。

## 1. 朝鮮民俗学会と郷土娯楽をめぐる先行研究

1930年代に展開された宋の文化運動（郷土娯楽論）に関する本格的な評価は，韓陽明によってなされた。

植民地知識人として宋錫夏が求めたのは、新たな民族文化の建設であり、彼の民俗学は新文化建設に服する民俗学であった。したがって、彼の民俗学の特徴として浮かび上がる資料の蒐集および保存に対する強い執着、現代的継承対策の模索と大衆教化、民俗学のアイデンティティ確立の為の模索などは、一次的に民俗学の為になされたが、延いては新文化建設の為になされたのである〔韓 1996：70-71〕。

韓は新文化建設のための宋の実践を高く評価し、その後の研究に影響を与えた。植民地期の権力関係を念頭においた実証的な研究は、南根祐によってなされた。南は、まず「朝鮮民俗学」論の課題を論じ、「日本人」の研究は植民地主義に服した同化主義の言説であるのに対し、「朝鮮人」の研究は文化ナショナリズムに基づいた土着主義の言説だという素朴な二項対立の構図が見受けられると指摘する。南は、当時の言説が発せられた文脈に引き戻し、宋の文化民族主義の政治性を検討している〔南 2002：99, 2004：155-156〕。

南根祐は、宋の民俗学への入門過程を復元し、小寺融吉（1895～1945年）らが主導した「郷土舞踊と民謡の会」の関心・影響を検討した上で、宋の郷土娯楽論と朝鮮総督府嘱託村山が進めた「銃後朝鮮の娯楽政策論」が類似していると指摘した。結局宋の郷土娯楽論は、抵抗的文化ナショナリズムを実践したのではなく、国民総力朝鮮連盟の「健全娯楽」振興運動に同調し、「生業報国」「健康報国」のための増産活動に服したと、結論を下さないわけにはいかない。このことが、朝鮮の「新文化」建設を志向した宋の朝鮮民俗学のリアリズムであり、文化ナショナリズムの思想的限界だったと主張した〔南 2002：123, 2004：176〕。

朝鮮民俗学は植民地状況の中で形作られたにもかかわらず、当時のコンテクストを無視して進められてきた先行研究に対し、南の問題提起は大きな刺激を与え、近年の研究に至大な影響を及ぼしている。また、その結論に対する賛否は置いておき、その問題提起の重要性を認めることが出来よう。南の議論は社会学や歴史学、文化論、文学分野では高く評価・支持される一方、論争が少なく、民俗学史に関心が低い韓国民俗学界では、南の問題提起以降、本格的な検討が少ないのが現状である<sup>3)</sup>。

林在海は、宋の「娯楽先導論」は植民地状況との関係はなく、「レクリエーションの純機能に該当」するとナイーブに主張している。林は、宋は「植民地状況の中でも総督府官僚や官辺学者が我が〔朝鮮〕文化を否定的に解釈して蔑視する〔ことを〕許さず、延いては我が国民〔朝鮮人〕を統制することで植民地政策を効果的に進めようとした日帝の手先の意思に正面から立ち向かった」と高く評価し、南根祐の研究を感情的に批判している〔林 2012：85-87〕。このような感情的な主張は大きな問題を持っており、植民地状況を踏まえた多面的な分析が必要である。それは、李勛相によって試みられた。

李勳相は、南の研究を「実践的」文化民族主義における仮面劇などの芸能が帝国権力に

よって抱き込まれていく様相を力動的に明かした」ものだと評価し、「[南の研究は] 植民地期における地域社会の様々な芸能がいわゆる体制民俗に転化する変化とその意味を分析し、植民地期における仮面劇などの歴史はもちろん、民俗学全般などに対する新たな議論の地平を切り拓いた。ただし、植民地期における仮面劇と近代性との複雑な関係は、植民権力とその言説に対する議論だけでは不十分であり、何よりも実際に芸能の場であった地域社会とその視点は議論されていない」と主張している[李 2012: 376~377]。実際に李は、この論文で地域社会の視点から1930年前後における東萊野遊をめぐる地域青年会の芸能意識についての動向を考察している。つまり、1928年には索戦（綱引き）を主催しながらも郷土芸術「東萊野遊」は風紀を乱すということで否定的だった青年会の主導者が、1935年になって東萊野遊を主導した状況を、1930年代に展開される「朝鮮学運動」の熱気と関連づけて考察している[李 2012: 397-406]。宋の郷土娯楽論は、総督府が昭和恐慌以降、朝鮮農村社会の経済的打撃を改善するために実施した農村振興運動（正式名称は農山漁村振興運動、1932~1940年）と関わっている。一方では、同時代に展開された朝鮮学運動とも重なっている<sup>4)</sup>。

南根祐の問題提起を発展的に検討して、朝鮮民俗学の郷土娯楽論を総合的に究明しなければならない。そのためには、①民俗学関係者、②朝鮮総督府（帝国権力）、③地域社会、④芸能者、⑤マスコミ・大衆（民衆）などの方面から複合的に捉えなければならないと筆者は考えている。南根祐は①②を、李勛相は③④を分析している。本稿では、先行研究を踏まえてまず、①宋の郷土娯楽論の展開を史的に検討する。そして②総督府と⑤マスコミなどの関連機関の動きを取り上げ、その関わりを検討する。具体的に宋が最も力を入れた鳳山<sup>ボンサン</sup>仮面劇（鳳山タルチュム、鳳山仮面ノリ、鳳山仮面舞劇、鳳山仮面舞（劇）などの表記があるが、本稿では鳳山仮面劇と記す）を検討したい。なお、宋のテキストは、『石南 宋錫夏——韓国民俗の再吟味』上・下〔国立民俗博物館編 2004、以下全集〕を使うが、書誌事項に誤りが多い。筆者は前稿で宋の新出資料を発掘してその誤りを補訂し、新目録を作成した[金 2013, 2014]。

## 2. 朝鮮郷土芸術の紹介と宋錫夏の苦杯

『朝鮮民俗』創刊号に載せられた学会の会則は、次の通りである。

第一条 本会は朝鮮民俗学会と称する。

第二条 本会は民俗学に関する資料の採探及び蒐集を行い、民俗学知識の普及及び研究者の親睦交詢を主とし、並びに外国学会との連絡及び紹介を行う。

第三条 本会の目的を達成するにおいて左記事業を行う。

一 機関誌『朝鮮民俗』を発行する。

二 時々例会及び講演会を開催する。

第四条 本会々員は本会趣旨目的に賛同して会費前納した者に限る。

第五条 本会々員は本会及び講演会に参席でき、雑誌を無料受覧の権利を有する。

第六条 本会事業を遂行するために会員中、若干名の委員を置き、委員は会員中の互選に  
拠る。

第七条 委員中幹事を選び、編輯会計庶務を担当する。幹事及び其の数は委員が決定する。

附則 本会の決議に依って本会則を変更できる。

民俗学会を掲げただけに、民俗学研究と資料採集を行い、内外の親交を図る目的で創立されたことが分かる。また、第2号の会則の下の「寄稿歓迎（但会員限）」には、次の論文及び資料を求めている。

原始信仰（例巫俗）、儀式、呪文 説話、伝説、神話、歌謡（民謡、童謡、婦謡、農謡、樵歌、牧歌、漁撈歌、商馬曲、歎乃声〔舟歌〕）方言、特殊隠語（例採蔘）禁忌、心理的特殊観念、謎語、俚諺、年中行事、生活様式、習俗、造型美術、舞踊、民俗劇、遊戯、玩具、民家、家具、衣服

一方、宋が書いた創刊辞には民俗（郷土）芸術に関する強い関心が表れている。

朝鮮にも民俗学の発達が顕著になってから既に数年が過ぎたが、（中略）統一した学会を設立すべき時期は早いどころか、晩時の嘆がある。（中略）固有民俗資料は一つ二つ湮滅していく。（中略）民謡は自動車の風に消え去ってしまい、草童の「樵歌」は、治道「ダイナマイト」音と共に、俗謡「アリラン」に変わった。これらは又採採できる方法はあるだろうが、承継者の生命には限りがあり一度他界すれば貴重な資料は永劫に採す方法がないのである。処容舞を伝えていた唯一の老妓が死亡して久しく、阿峴の本山臺が無くなってから数十年となる。

楊州の別山臺と栗旨の大広大〔竹広大〕も前轍を踏み、安城の女社堂が分散され、果川〔ユクルノイ（육흘녕이）〕も史的人物に帰した。このように遅れたにもかかわらず、これからは必ず資料採集はしておくつもりである〔全集 933〕。

宋は『朝鮮民俗』創刊号に消え去る民謡、処容舞、楊州の別山臺、栗旨の竹広大などの資料採集の必要性を強調している。

1933年の夏<sup>5)</sup>、宋は『京城日報』で金浦の農民踊が東京の「郷土舞踊と民謡の会」に派遣さ

れるという事実を知り、「日本舞踊批評界の第一人者」[全集 583]として尊敬する「小寺融吉氏に致賀兼、灯下不明の責を謝罪し、同舞踊の梗概を教えてくれと請嘱」したところ、小寺からその内容を事前に確かめてくれと頼まれる。そこで宋は総督府社会課、京畿道地方課、実地の金浦郡登村里を訪れ、李鍾泰と共にテストし、派遣するには問題が多いと判断する。それで「総督府社会教化係主任」に「此の際他処のと取換へたらどうかと進言する」も、優秀な郷土芸術を送りたいという宋の「真意」は黙殺される[全集 446-447, 633]。その時、鄭寅燮が東京出張に行ったので、鄭に頼んでその事情を伝えた。なお、小寺は鄭の早稲田大学英文科の先輩にあたり、宋を小寺に紹介したのも鄭である[南 2008: 25]。

日本青年館は明治神宮の造営事業に「労働奉仕」した青年たちのために建てられたが、その開館式記念公演「郷土舞踊と民謡の会」は1925年10月に開催された。小寺はその催して柳田国男(1875~1962年)、高野辰之(1876~1947年)と共に審査顧問に委嘱された。小寺は舞台監督として実際の演出指導にあたった[永田 1982: 182, 掛谷 1996: 43, 鈴木 2015: 31]。大会は、翌年から恒例行事となり、日中戦争でなくなる1936年まで10回にわたって続いたが、第8回大会(1934年)は「内地」だけではなく、アイヌの「船唄」と共に「朝鮮の豊年踊」(京畿道金浦郡陽東面登村里)<sup>6)</sup>が舞台化された[南 2004: 161~162]。

その東京派遣にあたり、宋は『東亜日報』(1934.3.30~4.1)に「民俗芸術の紹介について：金浦農民舞踊の東京派遣を契機に」を連載する。「郷土」は「一つ目は都市に対する鄙郷[田舎、地域]」、「二つ目は特殊地方[一地方]」という意味があり、「郷土舞踊と民謡の会」の郷土とは一地方の意味にあたりと指摘する。宋は、「総督府社会課及び道地方課が推薦する以上、間違いないと思っているが、十分に調査すべきで、場合によってはその派遣前に専門家によるテストも必要ではないか」と主張している[全集 630-631]。総督府社会課を意識した『東亜日報』の原稿に比べ、内地の雑誌『ドルメン』(3-9, 1934年)に発表した「沙里院民俗舞踊に就て」ではより批判的に書かれており、興味深い。宋は自分の「真意は朝鮮の郷土芸術中成る可く優秀なものを送りたい以外に何物もないのを、変な眼でブローカー視される[の]が不愉快であった」とし、「餅屋は餅屋であるから、今後あんなことはない方がよい」と批判してい



【図2】『京城日報』に報道された「郷土舞踊と民謡の会」派遣記事〔1933.6.30〕

る [全集 447]。

宋の批判は、民俗学者（植民地知識人）としてのプライドに起因する。また、鳳山仮面劇を紹介した「沙里院民俗舞踊に就て」の後半部でも再論していることから、「内地」に披露したい朝鮮の郷土芸術がまさに鳳山仮面劇であり、「全朝鮮で第一」[全集 428]の仮面劇を紹介できなかつたことに対する悔しさもあったと思われる。

### 3. 郷土芸術の王位＝鳳山仮面劇の「発見」

鳳山仮面劇は朝鮮半島の北側のものであるが、今の朝鮮半島を代表する仮面劇の一つとして高く評価され、1967年に韓国重要無形文化財（第17号）、2016年に北側の国家非物質文化遺産に登録されて韓国・朝鮮を代表する仮面劇として位置づけられている [朴銓烈 2001: 11, 金廣植 2019: 25, 朴永楨 2021: 5]。金日成は1946年春、平壤で鳳山仮面劇の公演を見て保存を指示し、1955年に記録映画を製作させている。金正日もまた1986年に記録映画の再制作を指示し、翌年に完成させている [朴 2021: 59-60]。一方韓国で鳳山仮面劇は、東萊野遊と楊州別山臺と共に「韓国三大仮面劇の一つ」に位置付けられている。

鳳山仮面劇を本格的に紹介した宋は、「朝鮮の人形芝居」（『民俗芸術』2-4, 1929年）、「朝鮮の民俗劇」（『民俗学』4-8, 1932年）、「五広大小考」（『朝鮮民俗』1, 1933年）、「朝鮮演劇」（『大百科事典』第17巻, 同）、「朴僉劇に対する数三考察」（『人形芝居』1-4, 同）で、鳳山仮面劇について言及していない。初めて言及したのは、『東亞日報』（1933年12月）に連載した「鳳山の舞踊仮面」でである。

筆者の性急な判断かもしれないが、中部と南部朝鮮における各種の仮面劇（舞踊を含める）が儼儀<sup>7</sup>系統であることは明白であるが、これで朝鮮仮面劇の全貌を議論出来ず遺憾であったが、この度、沙里院有志の好意で西朝鮮仮面劇を世の中に紹介でき、学界の為に慶賀すべきことと考えている [全集 425]。

宋は、李東碧（1890～？）氏らの鳳山仮面劇の関係者に会って調査しているが、それは1933年の夏以後と推定される [南 2018: 83]。宋は

鳳山の仮面劇はその演技から見ては東萊の野遊と楊州の別山臺に比するが、演出内容の豊富さは、全朝鮮で第一であり、仮面の製作技術は東萊のそれには及ばないが、統営 [五広大] に等しい。演者は楊州、東萊、統営（老人）、晋州のような下輩ではない。

筆者は5百年間、幾多の風霜を経験しながら伝承し、後世の学徒の朝鮮仮面の体系樹立に



不拔 [確固] な役割を果たした鳳山の仮面劇と同地方の人士に前述した演劇学上の功績とともに感謝と讃揚 [崇め称えること] してやまない [全集 428]。

と結んでいる。宋にとって鳳山仮面劇との遭遇は、感謝と賛美に満ちた喜びそのものであった。民俗学への入門の契機が留学中に接した「朝鮮には演劇がない」[全集 379, 477, 702, 金廣植 2019] という言説に対する反発であったとする宋の回想を思い起こせば、鳳山仮面劇こそ「内地」の観客に見せたい演劇であったはずである。

1934年の端午に宋が働きかけ、京城帝国大学・放送局・新聞社・朝鮮民俗学会共同で、「採録又は参観することにしたが」「已むなき事情」で「城大と学会のみ」の参観となった[全集 439]。城大からは秋葉が参加した[秋葉 1934:106]。村山も当初は参観予定だったようである。村山は、鳳山仮面劇の「事を聞いた私は数年前からは是非一度この仮面劇を実見し、娯楽に恵まれない朝鮮民衆の」仮面劇を「観察すると共に、私も亦民衆の一人となつて、その興味を満喫したいものと念じて居た」と回想している[村山 1937:1]。村山の夢は、1936年8月31日に実現する。総督府文書課囑託村山と呉晴によって鳳山仮面劇は優良娯楽として評価され、総督府活動写真隊、放送局、新聞社によって大々的に紹介される[南 2004:168-169, 2009, 2018]。総督府機関紙『毎日申報』(1910.8.30~1938.4.28, 1938.4.29以降は『毎日新報』に改題)によると、この企画は「消え去る朝鮮郷土芸術の復興のために総督府社会課で」実行したものである[1936.7.3]。

1933年に「世界に誇るべき」[全集 855] 鳳山仮面劇を発見し、翌年の「郷土舞踊と民謡の会」派遣や放送化に失敗した宋にとって、1934年は「朝鮮民俗芸術の上で忘れられない」年であった[全集 659]。『朝鮮民俗』創刊号に示したように、郷土芸術の保存を図る宋の願望は、1934年1月に晋州の五広大、端午に鳳山仮面劇、秋夕（旧暦のお盆）に慶州の舞剣之戯（新羅黄倡郎の伝説）の復活によって現実となる。宋は、舞剣之戯の復興消息に接し、「[慶州] 郡守 [郡の長] が郷土芸術を以て民衆の情緒生活を潤沢にすること以外は、ほかに私心がない学術的良心の所有者」と評価して郷土娯楽の重要性を述べている。年中行事は大衆の娯楽において「最も愉快な時期」であるが、「いままで様々な理由で廃絶されて、彼ら [大衆] は実に沙漠の暗夜行路にあったが、近年、一部の識者の注意喚起と民衆自身の真摯な態度により民俗芸術復興の機運が芽生えることを慶賀」している[全集 664]。宋は、このような機運を朝鮮学の社会文化的実践として捉えた[李 2012:373]。

1931年に朝鮮語文学会と朝鮮社会事情研究所が、翌年に朝鮮民俗学会が朝鮮人識者によって組織される。翌年には朝鮮語学会がハングル綴字統一案を制定し、朝鮮経済学会と哲学研究会も結成される。1934年5月には震檀学会が結成され、多様な分科学問の結集体が1930年代に登場する。また、1932年に延禧専門学校（今の延世大学校）の文芸誌『文友』、1934年に校

誌『延禧』、京城帝国大学法文学部出身者の同人誌『新興』、普成専門学校（今の高麗大学校）校誌『普成学会論集』が相次いで刊行され、金台俊『朝鮮漢文学史』（1931年）、『朝鮮小説史』（1933年）、白南雲『朝鮮社会経済史』（同）、金在喆『朝鮮演劇史』（同）が刊行されている〔辛2011a：177-178〕。

宋の郷土娯楽論は、朝鮮内部の朝鮮学運動によって支えられたものであると共に、昭和恐慌に直面した朝鮮農村振興策とも歩調を合わせて展開したといえる。1934年『大阪毎日新聞』朝鮮版（7月14、15、17日）に宋は「民衆の情緒と年中行事」（同年「朝鮮の民謡と舞踊」と題を換えて『郷土芸術』（3-8）に再収録）を連載し、郷土娯楽と民衆の情緒との関わりを述べている。野外仮面劇に「群衆は興奮と歓喜にみち」「夜の更けるのも忘れる、かゝる民衆の最上の娯楽も近年は許可制度になつた」と指摘し、総督府当局者に向けて次のように提言している。

農村振興策もこの情緒方面に意を注ぎ無闇に禁止を事とせず、経済的破綻を来さぬ程度で積極的に奨励すれば得る所多いと思ふ〔全集 523〕。

植民地当局に対するこのような提言を、宋は繰り返している。1938年6月『東亜日報』に連載した「民俗から風俗に」で宋は、湮滅する古い民俗から、現代に復活できる郷土娯楽を模索しているが、日中戦争前後に索戦（綱引き）が「近年に入り、警察当局で取締りにおける人手不足を理由に、許可を出さないことは限りない愛惜を感じる」〔全集 689〕とし、「農村娯楽としての絶対的価値」があり、「民衆の保険上でも、また健全な娯楽機関が存在しない朝鮮〔農村〕の実情を考慮」することを促している〔全集 689〕。宋は1939年頃、警察の郷土娯楽禁止に対し、時の警務局長に或る席上で会った時「あんなものを禁止するなんて頭がどうかしてゐる」と鬱憤を晴らしたと日本語で述べている〔全集 711〕。このような政策提言は、農村娯楽こそ農村振興策において不可欠な要素という確信から導き出されたものである。

#### 4. 郷土娯楽論の助長とその実践

東亜日報社は1935年3月に創刊15周年記念で「農・漁・山村の生活更作と文化振興」のための特別原稿を募集した。

一、都市と農村との関係 二、共同販制度の実際の得失 三、郷校財産の合理的利用方法 四、農・漁・山村の生活記録と共に、「五、農村娯楽の助長と浄化の具体的方案」が公募され、「生活が乏しいほど正当な娯楽の必要が切実になる。にもかかわらず近來の我が農村は、伝来の良い集团的娯楽を忘れる一方、かえって賭博などが盛んなようである。（中略）時間と勢力と物資の消耗に留まらない、農村生活に一抹の温潤味を加えると同時に、活力の増進を招来すべき

簡便かつ興味のある娯楽を設定したい」とその趣旨を説明している。

同じ頃、東亜日報社は社説「端午遊びの意義」（1935.6.3）で、「今日の慰安と快楽は明日の活動のための新精力の糧食となる。（中略）酒食その他で淳朴な農村人に遊蕩心を挑発し、お金を使わせ、その日の疲労が翌日にも治らない出来事が頻発しているようである。これは端午遊びの意義を忘却したもので、農民はもちろん、商人も警戒しなければならない」と主張している。このように東亜日報社は、健全な娯楽の助長が明日の新精力となることを郷土娯楽の浄化を通して図っていたことが読み取れる。

東亜日報社は、宋に「農村娯楽の助長と浄化に対する私見：特に伝承娯楽と将来娯楽の關係に就いて」（1935年6月22～7月15日、20回連載）を依頼した。その冒頭に編集部は「採択するものが見当たらず「民俗学者として、特に農村娯楽に関心を持つ宋錫夏氏の寄稿」を得たとことわっている〔全集 573〕。

宋は娯楽とは何かを問い、「今日の安息と快楽は明日の活動のためになり、新精力をつくる糧食となる」と述べていることから、宋の「新精力」〔全集 531, 565, 573, 630〕の生成論が東亜日報社の社説の延長線上にあると解釈できる。伝承娯楽の分類、在来娯楽の消長と本質、歴史、世界の国民娯楽の概観、輸入娯楽の影響、代表的な郷土娯楽を詳細に論じている。宋は普遍的な朝鮮伝承の娯楽の中、次のものを挙げる。

一. 索戦（綱引き）二. 石戦 三. 脚戯（朝鮮相撲）四. 鞦韆（ブランコ）五. 擲柶（ユンノリ）六. 芸術娯楽（山臺劇、鳳山仮面舞踊、五広大劇及び野遊劇、農樂）七. 遊戯娯楽 八. 労作的娯楽。

宋は連載の最後に「正しい娯楽の樹立は我々が生を授かったこの土に立ち、万分の一でもその恩に報いるための意識のもとで、経済破滅に直面した憂鬱な状況を明朗な娯楽で解消し、再び明日の出発のための新精力を涵養し、朗麗な生活を経営する目標にすべきである。そうしてその娯楽は陰陽の両面で偉大なる芸術の母胎にもなり、体質向上の淵源にもなるであろう」と結んでいる〔全集 630〕。文末の「附言」で宋は、本小論は指導者諸位に向けて書いたと明記している。

1936年の元旦、宋は『東亜日報』に「民俗の振作調査研究機関」の設立を提言している。宋は、伝来娯楽、競技娯楽調査及び研究委員会を組織し、「内地」の「郷土舞踊と民謡の会」と同じ趣旨で中央年次大会を開催することを具体的に提案している〔全集 680-681〕。それは、前述したように『朝鮮日報』により1937年5月17日の「第1回朝鮮郷土舞踊民謡大会」と、翌年4月25日から5月4日までの「全朝鮮郷土演芸大会」に具体化された。費用の問題もあり、従来の朝鮮民俗学会の役割を変貌させて、民俗の舞台化を試みたのである。二つの「中央大会」で最も注目されたのが「民俗芸術の最高峰」〔『朝鮮日報』1938.4.25, 5.1, 5.3〕鳳山仮面劇であった。また、中央大会の盛況により、再び1938年6月23日府民館で古典舞踊大会（朝光会主催）が〔『朝鮮日報』1938.6.19〕、1939年10月13日・14日に全朝鮮仮面舞踊演競大会（芸

林社主催) が開催される一方で [『東亜日報』 1939. 10. 10], 地方公演に波及していく。1937 年 5 月 25 日沙里院での「郷土舞踊民謡大会」 [『朝鮮日報』 1937. 5. 31], 1939 年 5 月 29・30 日海州での鳳山仮面劇公演 [『朝鮮日報』 1939. 5. 19], 1938 年と翌年 6 月に第 1, 2 回「江陵農楽競演大会」が開かれた [『東亜日報』 1938. 5. 30, 6. 16, 1939. 6. 6, 6. 20 縮刷北部版]。なお, 1937 年 9 月 27 日鳳山仮面劇は東京でも紹介され [『東亜日報』 1937. 6. 29, 『東京朝日新聞』 夕刊 1937. 9. 30], 1939 年「満州と北支にまで鳳山仮面劇が招請」された [南 2009: 293]。また, 1940 年 9 月 28 日に総督府は「普及助長すべき郷土芸術に鳳山仮面劇」を指定し, 慶会楼で南次郎総督も「臨席」して鳳山仮面劇を鑑賞するに至る [『毎日新報』 1940. 9. 28, 9. 29 夕刊]。

鳳山仮面劇が 1940 年代にも注目を浴びて 1940 年 2 月に日本コロムビアから音盤も発売されている [林慧庭 2020: 3]。三橋蓮子は同年 12 月に沙里院で「二宮新平 (李東碧) 氏の御好意により「鳳山タール」といふ舞踊をみ」たが, 郷土芸術保存会の二宮 (李) は「毎年五月五日の端午の節句に当会の主催」者で, 「野原を舞台として, 一夜中踊りぬかれる」と述べている [三橋 1943, 金 2019]。鳳山仮面劇は翌年 11 月にも府民館で公演され, 1943 年末は日本演劇協会の委員一行がそれを見に沙里院に訪問し, 二宮 (李) に案内されて観覧している [南 2018: 95]。

宋は 1938 年朝鮮日報主催の「全朝鮮郷土演芸大会」に関する感想を同新聞に寄稿している。宋は郷土演芸を「象牙の塔から民衆に」提示したのは, 大きな意味を持つと「感激」する一方, 芸能者に対し「時代の呼吸に乗り遅れた感がなくないが, これは当事者にも述べておいたが, 必ずや周到な用意のもとで, 再吟味・再出発する必要がある」と結び, 民俗学者として権威的な注文をつけ加えている [全集 658]。

## 5. 朝鮮総督府と郷土娯楽調査

『東亜日報』は 1920 年代初めから農村の娯楽について関心を示している [『農村問題』 1922. 9. 25, 「脚戯会について」 1926. 9. 1, 「農村振興策如何」 1927. 1. 9, 「朝鮮舞踊振興論」 1927. 8. 17 など]。しかし, 郷土娯楽に関する本格的な関心は 1930 年前後から始まる。「正月の民衆娯楽」を連載 (1929. 2. 22~3. 3) し, 全国における正月の民俗競技を中心に紹介している。1931 年以降は社説でも農村の娯楽問題を取り上げている [『娯楽と耽溺』 1931. 1. 25, 「索戦の得失」 1931. 3. 11, 「娯楽の健全化社会化」 1931. 11. 8 など]。一方, 総督府機関紙毎日申報は, 京城日報・ソウルプレス社との連合主催で「農人芸術品展覧会」 (1930. 5. 16~25) を開き [『毎日申報』 5. 12, 『京城日報』 5. 15], 「我が農村の娯楽は何か」を連載している [『毎日申報』 1931. 1. 25~2. 1]。

前述のようにこうした関心は, 農村振興策の一環として提起されているが, 地方団体の動きも確認できる。慶尚北道の郡守会議では農村美化の娯楽設備案が協議されて (1933. 6. 16), 江

原道青年団は「善良なる民衆娯楽の普及」に努めた〔三吉 1936:235〕。また慶尚北道は、農村娯楽教化のために娯楽委員会を組織した〔『朝鮮民報』1937.7.28〕。先述した京畿道地方課では、1933年「秋から地方娯楽に関する資料を収集」し〔『東亜日報』1934.4.14〕、翌年4月に東京の「郷土舞踊と民謡の会」に金浦農民舞踊団を派遣し、9月に『農村娯楽行事彙』を編纂して一定の反響を呼んでいる。例えば、『朝鮮及満洲』（326号）はその要点を詳細に紹介している〔本誌記者:1935〕。『農村娯楽行事彙』の「頭言」は次の通りである〔京畿道地方課 1934:1-2〕。

- 一、娯楽は情操を陶冶し心身の疲労を癒し得るものにして（中略）朝鮮在来の農村娯楽は其の種類極めて少きのみならず娯楽そのものも単調にして無味乾燥に傾き、加ふるに種々の弊害が之に伴ひ改善を要するものが尠くない、故に之が改善を図り其の良きものを奨励せむ為本書を編したのである。
- 二、本書は京畿道に於て（中略）由来を略述し且実行上改善すべき点を概示したのである。
- 三、（中略）農村行事にして其の改善を要する点あるのは摘述したのである。
- 四、娯楽として（中略）奨励改善を要せざるものは省略したのである。
- 五、（中略）行事として新に奨励すべきものは其の実行方法を掲述したのである。
- 六、（中略）総て本書には陰暦〔旧暦〕を用いたのである。
- 七、本書は（中略）寧ろ従来のものに改善を加へ以て農村振興運動促進の資に供したるに過ぎぬから、農村指導者に於て右趣旨に拠つて地方に適する娯楽を案出しこれを有効に行はしむることは最も望ましい。

前述したように、宋が農村振興策を念頭におき、民俗学者として消え去る郷土娯楽の復興に奔走したが、その郷土娯楽論は朝鮮民俗の世界的普遍性に基づいていた。それに対し、京畿道地方課は同じく農村振興運動促進を目指して農村指導者にその活用を促しているものの、朝鮮の郷土娯楽観は偏見に満ちたものであった。道地方課において、農村娯楽は徹底した「改善」の対象に他ならなかった。短い「頭言」に「改善」という言葉を6回も使っていることから窺い知ることができる。

一方、文部省社会教育局は「昭和5年4月以降」民



【図3】『農村娯楽行事彙』の表紙  
〔京畿道地方課 1934〕

衆娯楽を広く調査して、『民衆娯楽調査資料』全15巻(1931~1942年)を文部省で刊行した。文部省社会教育局は『民衆娯楽調査資料』第1輯で「元來娯楽に乏しき農村に於ては歴史を有する郷土娯楽は尚農村生活者にとって最も有力なる慰安である」と主張し、郷土娯楽の中、「総数四百余种を数へ、その中三百六〇余种、即ち大部分は踊及唄」をまとめた〔文部省 1931 : 3〕。これらの「内地」の動きに影響を受け<sup>8)</sup>、総督府では前述した村山智順を中心とした文書課と社会教育課が郷土娯楽を調査した。村山の言説は先行研究に詳しいので〔南 2004 : 168-178〕、以下では社会教育課の動きを中心に分析したい。

総督府学務局が郷土娯楽に注目したのは、1936年10月社会教育課の新設以降である。学務局社会課が刊行した1933年及び1936年版『朝鮮の社会事業』は郷土娯楽を触れていない。社会課から組織が改編されて「社会教育教化に関する事務」を担当するようになった社会教育課は、1938年2月に『朝鮮社会教化要覧』を刊行している。その中に「農村の娯楽」が取り上げられている。「娯楽は生活の疲労を医し、活動能力を高め、社交欲を満足せしめて、共同心を培養し、情操を陶冶して生活を浄化する」効果があるとして娯楽撰択の標準を八つに挙げる。

一. 農山漁村の生活に即したるもの 二. 職業と相関的のもの 三. 郷土的のもの 四. 体育的のもの 五. 化民成俗的のもの 六. 大衆共同的のもの 七. 実施容易なるもの 八. 経費の少なきもの  
〔朝鮮総督府 1938 : 97-98〕。

1938年7月11日、『朝鮮日報』『東亜日報』『毎日新報』などは、上記の内容を一斉に報じているが、いずれも学務局が「民衆娯楽の先導方針」を図っていると指摘する。朝鮮日報社は翌日の社説「民衆娯楽の指導」でそれを歓迎するも、「地方下級官吏が当局の根本方針を理解できない」という弊害を指摘する。つまり、「娯楽は農閑期に行うだけに、愉快に指導し、決して強制的に無理に行ってはいけぬ。ましては当局で根本方針を策定する上で、民衆の生活、現状を参酌して真に娯楽としての価値を發揮しようとしている。当局の慎重な対策を願う所である」と結んでいる。

『朝鮮日報』は7月28日付けに後続記事を出している。「郷土娯楽の保護助長の為に総督府社会教育課では1年半もかけて全朝鮮の隅々の民衆娯楽を調査・蒐集し、近日膨大な調査が完了」と報じて、社会教育課の当局者の話を伝えている。「娯楽を以て疲労を忘れ、また良い風俗と習慣を持ち、郷土の親睦を図ることができる。今後、この調査に基づき、過去に無視されてきたこの娯楽方面に指導助長と保護の方策を樹立したい。一般社会でもこの点をよく理解して共に保護・助長の結果を出せるようにしてもらいたい」と、『東亜日報』も社説「郷土娯楽と競技の助長」(7.30)でそれを歓迎し、「我々に固有の文化と伝統を取り戻す時が再来した。(中略)指導助長することは、我々にも頼もしい出来事であり、賛意を表してやまない。(中略)欧米文明がいくら發達したとしても我々のものがもっと發達したのも少なくない。(中略)今後、積極的に指導助長する必要を切実に感じる所である」と結んでいる。

このように、朝鮮の2大「民族新聞」は一斉に当局の「郷土娯楽保護・助長論」に賛意を示し、東洋文明の自覚を訴え、精神論を強調していることが分かる。2大新聞に多くの論考を発表した宋も、その動きを歓迎し、それに関わっている。1941年に戦時体制が強化される中で、村山は『朝鮮の郷土娯楽』を刊行した。また、国民総力朝鮮連盟は銃後の健全娯楽に関心を示してその影響を受けて『三千里』『朝光』『緑旗』などに多くの朝鮮人と日本人がその「指導助長」対策を述べている。その中で宋はその特集号と座談会に参加して積極的に発言している[南 2004: 173-176]。この時期に展開した「健全娯楽論」をめぐる多様な意見に関する詳細な考察は今後の課題としたい。その中で宋の民俗学の性格もより明確になるだろう。ただし、それは1930年前後に本格化した郷土娯楽論が朝鮮人（民俗学者、識者、民衆、言論）と総督府（村山などの学者、帝国日本の影響、農村振興策、地方団体の動き）の競合の中で広げられたことを認識し、その現代的な意味を問わなければならないであろう。

## おわりに

1905年11月文部省普通学務局は、童話・伝説・俗謡などを各府県に報告させ、1914年に高野辰之らはそれをまとめて、文部省文芸委員会編『俚謡集』を刊行した。文部省の「童話等調査」が「通俗教育取調上必要」から行われたのと同じく、朝鮮半島でも1908年の保護期の学部で「俚謡童謡査察」が普通学校（朝鮮人生徒用の初等教育機関、1938年から小学校に変更）に依頼して実施された[金 2020]。その後、学務局は1936年初めに朝鮮に「現行する郷土娯楽を、府郡島管下の小学校（当時の普通学校）に依頼して蒐集した」[村山 1941]。それは1930年4月に文部省社会教育局が実施した農村娯楽調査に影響を受けたものである。学務局社会課が実施したと思われる1936年調査は、同年の社会教育課新設によって検討され、その後調査資料が村山にわたり、1941年に『朝鮮の郷土娯楽』が刊行されたのである。

「内地」留学時に、「朝鮮には演劇がない」という言説に反発を覚えて展開された宋の民俗学は、はじめから郷土芸術に強い関心を持っていた。一方、経済危機に直面した状況下で総督府の農村振興策と共に1930年代朝鮮学の熱気の中で、「朝鮮的なもの」が見直され、1934年1月に晋州の五広大が、5月に鳳山仮面劇が、8月に慶州の舞剣之戯が復活・再開される。

宋は朝鮮の小寺を目指し、1936年の元旦、郷土娯楽の中央大会を提言し、1937年5月に朝鮮日報社の後援を得て「第1回朝鮮郷土舞踊民謡大会」を朝鮮民俗学会主催で開催する。その後少なくとも1944年まで郷土芸術大会が相次いで開かれた。1941年に戦時体制が強化される中で、郷土娯楽は警察によって一部禁止される一方、村山の『朝鮮の郷土娯楽』が出される。また、国民総力朝鮮連盟は銃後の健全娯楽に関心を示すという状況が同時に進行している。毎日新報社は、1941年6月に全朝鮮名唱名舞選抜競演大会を開催し、11月豊年祭典に鳳山仮面

劇などを披露している〔『毎日新報』1941.6.19夕刊, 11.2〕。翌年も7月12日から3日間朝鮮音楽舞踊の大祭典を, 8月13日から2日間名唱名舞大会を開催している〔『毎日新報』1942.7.11, 8.12〕。1944年に黄海道の金川と信川では農民慰安のための脚戯鞞韃大会を開いた〔『毎日新報』1944.7.15, 8.4〕。

郷土芸術大会は, 解放後の混乱の中でも盛んに行われている。1946年5月に昌慶園で農楽競演大会(国楽院主催, 4日間)が, 10月に徳壽宮で第1回郷土民謡と民俗舞踊発表大会(国楽院他主催, 4日間)が, 12月には農楽競演大会(京畿道農会主催)が開催された。また, 翌年には第2回全国農楽競演大会実施の記事が見られ, 1948年4月にも昌慶園で全国民俗芸術大会(戦災民特別救済会主催)が開催されている〔南 2009: 300~301〕。鳳山郷土芸術保存会も国都劇場(1947.7.8~10, 朝鮮民俗学会後援)で鳳山仮面劇を盛会裏に行い〔『漢城日報』7.9.10, 『自由新聞』7.10〕, 11,12日に続いて8月, 9月も公演を行っている〔南 2018: 104〕。

また1946年11月に郷土芸術文化協会は, 民族芸術樹立を目指して郷土音楽の芸術性・大衆性を啓蒙するために, 第1回全国郷土芸術競演大会を8日から12日まで徳壽宮で開催している〔『自由新聞』11.1, 『京郷新聞』11.7〕。この大会の会長は宋, 副会長は李寛求となっている〔『自由新聞』11.1〕。宋は, 解放後の多忙の日程の中で第1回全国郷土芸術競演大会を大会長として導いたことが確認できる。大会の後, 宋は民俗芸術に関する二つの論考を書いていて解放後の考え方を確認することができる。「民俗舞踊展望」〔『京郷新聞』1946.12.19〕と「民族芸術問題」〔『民主警察』1948年10月遺稿〕がそれであるが, 二つの論考とも植民地期に郷土という言葉は, 「民族」の代わりに「民族意識を覚醒させるために逆利用」したと宋は主張している〔全集 694〕。「民俗芸術」を郷土芸術の広い意味で捉える考え方は同じだが, 民族芸術は「民俗芸術の精粹の集大成であるべき」だと主張している〔全集 695〕。このような文化民族主義に基づいた「民族芸術論」は, その後, 朝鮮戦争を経て無形文化財, 「全国民俗芸術競演大会」(1958, 1961~1998, 1999年からは韓国民俗芸術祭に変更)に受け継がれていった。その後の展開については今後の課題としたい。

注

- 1) 日韓の民俗「芸能」「芸術」については, [岩本編 2013]収録の諸論(岩本通弥, 丁秀珍, 南根祐, 俵木悟)を参照。なお, 民俗芸能研究の思想史は[橋本 2006, 鈴木 2015]を参照。
- 2) 鄭寅燮は, 他の証言においても宋錫夏は「私〔鄭〕とは同郷人であり, ソウルに上京し「孫晋泰」と3人が朝鮮民俗学会を創設する際の宋の心身はひたすら一生をその方面に捧げたいということであった」と述べている〔宋 1960: 跋文〕。また鄭は, 「語文研究のほか, 宋錫夏, 孫晋泰と共に韓国民俗学会を創立し, 京城帝大の秋葉隆教授および韓国民俗研究者今村鞞氏をその客員として, 民俗の発掘に努力した」と述べている〔鄭 1983: 7〕。



- 3) なお、李相賢などは近代民俗の舞台化を検討している [李 2008, 李 2021]。また金蘭珠・宋宰鏞は、朝鮮総督府の郷土娯楽振興策を論じ、それは「当時の朝鮮側の民族主義系列にも大いに歓迎された」と言及するに留まっている [金・宋 2011: 408]。丁秀珍は「宋錫夏の観点は理性ではなく感性に基づき、民族文化の真髓を構築しようとしたドイツ、東・北欧の浪漫的初期民俗学に似ている」と指摘し [丁 2010: 299]、孔任順は、朝鮮人「民俗学者と野談師らが郷土娯楽の勧奨の雰囲気に合わせて、郷土娯楽を本格的な議論の対象にした」ことを指摘するに留まっている [孔 2013: 371]。
- 4) 車承棋は、1930年代の朝鮮研究の傾向を大きく三つに分けている。① 総督府により政策的に推進された朝鮮学。② 東亜日報・朝鮮日報社の民族主義系列の文化運動と「朝鮮主義文化運動」。③ 歴史的唯物論に立脚した朝鮮学 [車 2002: 26~27]。近年、辛珠柏の朝鮮学関連研究は注目に値する [辛 2016]。辛は、1930年における朝鮮学の地形を五つに分けている。① マルクス主義と距離をおいた運動としての朝鮮学。② 実践的運動に距離をおいた考証学的朝鮮研究。③ マルクス主義に立脚した科学的朝鮮研究。④ 不完全だが、純粋な学問をめざした朝鮮研究（震檀学会）。⑤ 在朝日本人による「制度としての朝鮮学」（京城帝国大学、青丘学会） [辛 2011b: 99~104]。これらの五つの動きは複雑に関わりながら互いに結び付いて、「朝鮮的なもの」に対する再考を促した。宋は①と④に該当し、⑤の動きにも敏感であった。震檀学会の発起人の一人で、1945年12月から震檀学会委員長を務めたのが宋であり、彼の実践は朝鮮学の展開と深く関わっている [鄭 2016]。
- 5) 宋は1933年夏と記しているのみである。筆者の確認によると、正確には6月30日である。〈図2〉をご参照頂きたい。
- 6) 『朝鮮日報』（1934年2月26日夕刊）によると、演目は舞童、庭踊、月遊、歌遊、庭園舞の五つであった。本田安次は「遙々朝鮮よりの珍客」の舞踊を見て「[舞童の] 踊り方は肩の上でも地べたでも同じことであつたが、その形式は、内地のものとは少しく異つてゐた。後の仮面踊に於ても同様であつたが、(中略) 見てゐてなかなか愉快なものがあつた。八重山歌舞の洗練された美しさはないが、原始的で素朴な、フォルク・ダンス、或はカントリー・ダンスの面白さがあつた。日本のステージ・ダンスも、もう一度あの原始な乱舞と群舞の形式に立帰つて、さて出直して新たに工夫を」しなければならないと述べている [本田 1934: 14]。
- 7) 儺儀：儺礼、驅儺、大儺、儺戯とも。大晦日に民家や宮中で新年の厄と雑鬼を追い払う儀式。中国から伝来したもので、『周礼』夏官司馬下条と『後漢書』礼儀志に方相氏の儀式が見える。
- 8) 『東亜日報』（1929.6.9）は早くから「社会教育局新設」という見出しでその事業内容を報じている。また京畿道教育会は、「農村更生参考案」（文部省社会教育局）を掲載し（『京畿教育』3, 1933年）、総督府社会課は、1932年「秋文部省主催府県学務部長会議ノ際示サレタ」『社会教育ニヨル農村更生参考案』（全8頁）という冊子を出しているが、そこには「農村娯楽ノ改善」（5頁）項目が明記され、文部省の動きを紹介している。

文 献

日本語文献 (50音順)

- 秋葉隆 1934 「松隅里の長柱」『朝鮮』235 朝鮮総督府
- 李杜鉉 (イ・ドゥヒョン) 1990 『朝鮮芸能史』東京大学出版会
- 岩本通弥編 2013 『世界遺産時代の民俗学：グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』  
風響社
- 呉晴 (オ・チョン) 1937 「鳳山タール脚本」『朝鮮』261 朝鮮総督府
- 掛谷昇治 1996 「日本青年館と柳田国男」柳田国男研究会編『柳田国男・ジュネーブ以後』三一書  
房
- 神田海之助編 1934 『第八回 郷土舞踊と民謡』日本青年館
- 金廣植 (キム・クァンシク) 2013 「朝鮮民俗学会の成立とその活動」泉水英計他『国際常民文化  
研究叢書 4 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学』神奈川大学国際常民文化研究機  
構
- 金廣植 2014 『植民地期における日本語朝鮮説話集の研究：帝国日本の「学知」と朝鮮民俗学』勉  
誠出版
- 金廣植 2017 「朝鮮民俗学の実践論：宋錫夏の郷土芸術・娯楽論を中心に」『韓国朝鮮の文化と社  
会』16 韓国・朝鮮文化研究会
- 金廣植 2019 「鳳山仮面劇と民俗芸能の資源化」『韓国朝鮮の文化と社会』18 韓国・朝鮮文化研究  
会
- 金廣植 2020 『韓国・朝鮮説話学の形成と展開』勉誠出版
- 金両基 (キム・ヤンギ) 1967 『朝鮮の芸能』岩崎美術社
- 金両基 1987 『韓国仮面劇の世界』新人物往来社
- 京畿道地方課 1934 『農村娯楽行事彙 附立春書例示』京畿道
- 熊谷辰治郎 1979 「日本青年館と民俗芸能運動」『民俗芸能』59 民俗芸能の会
- 笹原亮二 1992a 「芸能を巡るもうひとつの「近代」：郷土舞踊と民謡の会の時代」『芸能史研究』  
119 芸能史研究会
- 笹原亮二 1992b 「引き剥がされた現実：「郷土舞踊と民謡の会」を巡る諸相」『共同生活と人間形  
成』第3・4号 和敬塾教育文化研究所
- 全京秀 (ジョン・ギョンス) (板垣竜太訳) 2005 「赤松智城の学問世界に関する一考察：京城帝国  
大学時代を中心に」『韓国朝鮮の文化と社会』4 韓国・朝鮮文化研究会
- 鈴木正崇 2015 「『民俗藝術』の発見：小寺融吉の学問とその意義」『明治聖徳記念学会紀要』52  
明治聖徳記念学会
- 宋錫夏 (ソン・ソカ) 1934 「沙里院民俗舞踊に就て」『ドルメン』第3巻第9号 岡書院
- 朝鮮総督府学務局社会教育課 1938 『朝鮮社会教化要覧』朝鮮総督府学務局社会教育課
- 鄭寅燮 (チョン・インソプ) 1983 『温突夜話』三弥井書店
- 永田衡吉 1982 『民俗芸能・明治大正昭和』錦正社
- 南根祐 (ナム・グヌ) 2004 「『実践的』文化ナショナリズムの虚実：宋錫夏の「朝鮮民俗学」を中  
心に」『佛教大学総合研究所紀要』2004年別冊〔一〕
- 南根祐 2009a 「韓国民俗学の現在：「民俗」の文化財化と観光資源化を中心に」『日本民俗学』259
- 南根祐 2010 「朝鮮民俗学会の創立と活動」徐禎完・増尾伸一郎編『植民地朝鮮と帝国日本』勉誠  
出版
- 橋本裕之 2006 『民俗芸能研究という神話』森話社

韓国・朝鮮民俗学者宋錫夏における郷土芸術（民俗芸能）の展開（金）

- 本誌記者 1935 「朝鮮に於ける農村の年中行事と其の娯楽に就いて」『朝鮮及滿洲』326 朝鮮及滿洲社
- 本田安次 1934 「第八回郷土舞踊と民謡大会を見て」『旅と伝説』第7年第5号 三元社
- 三橋蓮子 1943 「朝鮮郷土舞踊「鳳山」タール」佐谷功編『日本民族舞踊の研究』東寶書店
- 三吉岩吉 1936 『朝鮮に於ける農村社会事業の考察』行政学会印刷所 非売品
- 村山智順 1937 「民衆娯楽としての鳳山仮面劇」『朝鮮』261 朝鮮総督府
- 村山智順 1941 『朝鮮の郷土娯楽』調査資料47 朝鮮総督府（朴銓烈訳 集文堂 1992）
- 文部省社会教育局編 1931 『民衆娯楽調査資料 第1輯 全国農村娯楽状況』文部省
- 大阪毎日新聞朝鮮版 1934年2月13日「燦然たる文化を紹介 生れ出た『朝鮮民俗学会』」
- 朝鮮民報 1937年7月28日「農村娯楽教化に娯楽委員会を組織」など

朝鮮語文献（가나다順）

- 孔任順 2013 『植民地時期 野談의 娯樂性과 프로과간다』LP  
国立民俗博物館編（全集）2004 『石南 宋錫夏：韓國民俗의 再吟味』上・下 国立民俗博物館
- 金廣植 2012 「孫晋泰의 比較說話論考察：新資料發掘과 著作目錄을 中心으로」『近代書誌』5  
近代書誌学会
- 金廣植 2017a 「宋錫夏의 民俗 및 民俗学 概念의 展開様相」『実践民俗学研究』30 実践民俗学会
- 金蘭珠・宋宰鏞 2011 「日帝強占期 郷土娯楽 振興政策과 民俗놀이의 展開 様相」『比較民俗学』44 比較民俗学会
- 金栄美 2015 「戦時期 朝鮮総督府의 娯樂政策과 그 特徴」『韓日關係史研究』52 韓日關係史学会
- 金日出 1958 『朝鮮民俗 탈놀이 研究』科学院出版社
- 金泰坤編 1984 『韓國民俗学原論』詩人社
- 南根祐 2002 「『朝鮮民俗学』과 植民主義：宋錫夏의 文化民族主義를 中心으로」『韓國文化人類学』35卷2号 韓國文化人類学会。
- 南根祐 2008 『『朝鮮民俗学』과 植民主義』東国大学校出版部
- 南根祐 2009b 「民俗의 競演과 芸術化」『韓國文学研究』36 東国大学校
- 南根祐 2013 「民俗 概念 再考」『実践民俗学研究』21 実践民俗学会
- 南根祐 2014 『韓國民俗学 再考』民俗苑
- 南根祐 2018 「鳳山 탈놀이의 近代」『比較民俗学』67 比較民俗学会
- 物質文化遺産保存委員会編 1955 『朝鮮의 民間娯樂』朝鮮国立出版社
- 朴桂弘 1992 『増補 韓國民俗学概論』蜚雪出版社
- 朴永楨 2021 「北韓 無形文化遺産 保護와 伝承様相」『國樂院論文集』43 國立國樂院
- 朴銓烈 2001 『鳳山탈춤』화산文化
- 宋錫夏 1935 「伝承音楽과 廣大：史的 回顧와 將來의 用意」『東亜日報』10月8日 東亜日報社
- 宋錫夏 1938 「民俗에서 風俗으로」『東亜日報』6月10, 12, 14日 東亜日報社
- 宋錫夏 1960 『韓國民俗考』日新社
- 辛珠柏 2011a 「『朝鮮学運動』에 關한 研究動向과 새로운 試論的 探索」『韓國民族運動史研究』67 韓國民族運動史学会
- 辛珠柏 2011b 「1930年代 初中盤 學術場의 再構成과 關連한 試論的 探索」『歴史問題研究』26

歷史問題研究所

- 辛珠柏 2016 『韓國歷史學的 起源』 휴머니스트
- 李杜鉉 1969 『韓國假面劇』 韓國假面劇硏究會
- 李杜鉉 1997 『註釋本 韓國假面劇選』 敎文社
- 李相賢 2008 「日帝強占期 ‘舞台化된 民俗’ 의 登場 背景과 特徵」 『比較民俗學』 35 比較民俗學會
- 李주영 2021 「1930年代 〈봉산탈춤〉 과 傳統의 향방」 『語文論集』 86 中央語文學會
- 岩本通弥 2019 「新版·‘民俗’ 을 對象으로 하기 때문에 民俗學인가」 『日常と文化』 7 日常と文化硏究會
- 李勛相 2012 「植民地期 慶尙 地域社會의 탈춤 ‘復興’ 運動과 主導者들 : 東萊 野遊 演行의 文化政治學」 『大東文化硏究』 79 成均館大學
- 印權煥 1978 『韓國民俗學史』 悅話堂
- 任東權 1964 「韓國民俗學小史 解放後」 『民族文化硏究』 創刊號 高麗大學
- 任哲宰 1992 「楊州別山臺놀이, 鳳山탈춤, 康翎탈춤 臺詞採錄 過程에 대하여」 『比較民俗學』 9 比較民俗學會
- 林在海 2012 「朝鮮民俗學會의 創立과 韓國民俗學의 길」 『21世紀 民의 再解稜과 民俗學』 韓國民俗學會 冬季國際學術大會 資料集 2012年12月7日
- 林在海 2013 「朝鮮民俗學會創立의 產婆 宋錫夏와 韓國民俗學의 길」 『韓國民俗學』 57 韓國民俗學會
- 林慧庭 2020 「假面劇 伴奏音樂의 斷絶과 傳承 : 鳳山탈춤을 中心으로」 『韓國音樂史學報』 64 韓國音樂史學會
- 張哲秀 1996 「民俗學硏究 50年史」 『韓國學報』 82 一志社
- 全京秀 1999 『韓國人類學 百年』 一志社 (岡田浩樹·陳大哲譯 2004 『韓國人類學的百年』 風響社)
- 全京秀 2013 「朝鮮民俗學會와 『朝鮮民俗』 의 植民知와 隱抗策 : 植民地混種論의 可能性」 『民俗學硏究』 33 國立民俗博物館
- 鄭秉峻 2016 「植民地 官制 歷史學과 近代學問으로서의 韓國歷史學的의 대동 : 진단학회를 中心으로」 『社會와 歷史』 110 歷史韓國社會史學會
- 丁秀珍 2010 「原形論의 民俗學的 專有 : 韓國民俗學的의 解體와 展望」 『比較民俗學』 42 比較民俗學會
- 鄭寅燮 1966 「朝鮮民俗學會 : 記憶나는 대로」 『民族文化硏究』 2 高麗大學
- 趙芝薰 1964 「韓國民俗學小史 解放前」 『民族文化硏究』 創刊號 高麗大學
- 車承棋 2002 『1930年代後半 傳統論 硏究』 延世大學校大學院博士論文
- 崔吉城 1970 「韓國巫俗硏究의 過去와 現在」 『文化人類學』 3 韓國文化人類學會
- 韓陽明 1996 「石南宋錫夏의 民俗硏究와 民俗學史의 位相」 『韓國民俗學』 28 韓國民俗學會
- 東亞日報 1937年5月9日 「文化遺産을 再吟味 郷土藝術을 살리자!」
- 每日申報 1937年6月15日 「鳳山탈춤의 功勞者 李東碧氏」
- 每日新報 (每日申報) 1941年6月19日 「郷土藝術의 精華」
- 自由新聞 1946年11月1日 「全國郷土藝術大會」
- 朝鮮日報 1932年4月16日 「民俗學會創立 五月에 『朝鮮民俗』 創刊」 など

## 要 旨

朝鮮民俗学会（1932 創立）は、朝鮮における民俗学の歴史において重要な画期となるが、これを考えるにあたっては、郷土芸術・娯楽の問題を避けることはできない。朝鮮民俗学会については、植民地主義的な日本人研究者と、文化的ナショナリストたる朝鮮人研究者の呉越同舟といった図式的解釈が支配的だったが、南根祐や李勛相の近年の研究が明らかにしているように、実態は複雑である。とくに、郷土芸術・娯楽を捉えるためには、民俗学者だけではなく、総督府、地域社会、芸能者、マスジャーナリズムのそれぞれの動向を踏まえた関係性の把握が重要になる。本稿では、この時期の郷土芸術・娯楽に大きく関与した宋錫夏を中心に考察する。宗は、日本の「郷土舞踊と民謡の会」を参考に「朝鮮郷土舞踊民謡大会」などの運営に携わる。それは学問的良心と自文化への自身に基づいた努力であった一方、郷土芸術・娯楽を健全化することで農村再編を企てる植民地権力やマスジャーナリズムとの共犯関係をともなったものであったことも看過できない。

キーワード：宋錫夏、郷土芸術・娯楽、朝鮮民俗学会、郷土舞踊と民謡の会、朝鮮郷土芸能民謡大会

## Abstract

The Korean Folklore Society (founded in 1932) was an epoch-making in the history of folklore studies in Korea. In considering this, the issue of local arts and entertainments cannot be avoided. The Korean Folklore Society has been dominantly considered to a kind of the same boat both the colonialist Japanese researchers and the cultural nationalist Koreans riding on. However, its reality was more complex as recent studies by Nam, Kun Wu 南根祐 and Lee, Hun Sang 李勛相 have shown. To understand local arts and entertainments in the period, it would be important to understand not only the folklorists, but also the Korean Governor-General (Imperialist authorities), local communities, performing artists, and mass journalism and their structural relationships. This paper focuses on SONG Seok-ha 宋錫夏, who was heavily involved in local arts and entertainment during this period. SONG was influenced by the “The Folk Dance and Folk Song festival” in Japan and took part of the management of the “The Korean Folk Dance and Folk Song festival” and other events in Korea. While his effort based on his academic conscience and pride for the Korean culture, it cannot be overlooked that he was also involved complicity with the colonial power and mass journalism which sought to reorganize the countryside by making local arts and entertainment “harmless”.

**Keywords:** SONG Seok-ha, folk arts and entertainments, Korean folklore Society, The Folk Dance and Folk Song Festival, the Korean Folk Dance and Folk Song festival